

サードプレイスの変容

——場所の動態性をめぐって——

The Transformation of the Third Place:
Putting the Dynamism of Place into Perspective

真保 元

キーワード：サードプレイス, 場所, 空間, 動態性, 移動

The Third Place is neither a home nor a workplace; it is truly a third place. This study develops theories of place in folklore studies and discusses the Third Place as imbuing everyday spaces with meaning. Previous research on the third place has relied heavily on quantitative surveys, resulting in a static understanding. Based on qualitative survey findings, this study clarifies the dynamism of the third place. To achieve this, the study investigated how people traverse and utilize various spaces. By analyzing the results, this study attempts to examine the relationship between third places and mobility. Overall, the experience of the Third Place transforms with changes in social circumstances such as employment status. A Third Place can also be newly formed due to changes in daily travel routes such as commuting paths, or it can cease to exist due to the unexpected movement of others. When commuting routes change, the facilities people use change; if other users are unwelcome, people stop going to that place. These natural phenomena represent the daily activities of people that have become self-evident to the extent that they are invisible and

never questioned. Folklore studies—the study of the everyday—has turned its gaze toward such self-evident daily lives. This study demonstrates how the concept of the Third Place can reveal the evolution of residents' places of respite in relational contexts.

目次

はじめに

I サードプレイスをどのように捉えるか

II サードプレイスを過ごす

III 動き続ける日常の中で見えてくるもの

むすびに

注

参考文献

はじめに

人間は空間に何らかの意味づけをしながら日々生活をしている。そのような意味づけられた空間を人文地理学では「場所」と名づけてきた。人びとがそれぞれに見出す快適な空間、「居場所」などはその最たるものの一つである。そして、こうした居場所を捉える概念として、アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグが提唱した、カフェなどの家庭でも職場でもない第三の場所を意味するサードプレイスがある。

本稿はそのような空間が人びとに体験される様態に関心をおく。民俗学では人びとが空間をめぐって形成している制度や慣習、それをめぐる言説や観念を研究してきた。これらの議論を、仮に民俗学の場所論的な研究として位置づけることができるならば、本稿の作業もそのなかにあるといえるだろう。本稿で試みるのは、サードプレイスという概念を通して、人びとの空間との関わりかたを明らかにする作業である。日々の暮らしのなかで身をおく空間

に、自分なりに特別な場所を設けようとする人の姿を照射する点で、このサードプレイスという考え方は、民俗学の近年の研究潮流にも裨益するものであると筆者は認識している。民俗学が日常学としての側面を持つならば、生活者たちの日々の場所経験を捉えることが急務であり、その際の手がかりとしてサードプレイスは有効であると考えられるからである。

しかし、これまでのサードプレイス研究は量的研究が盛んなこともあり、対象の静態的理解に陥ってきた。これに対し、本稿では、サードプレイスが場所の変容や人の移動によって、きわめて動態的な性格をもつこと、また、生活者の認識によって様々なあり方が存在することを明らかにする。例えば、サードプレイスは所与のものではなく、不断に生成されていくものであり、また、サードプレイスであった空間がサードプレイスではなくなるということも想定できる。以上を念頭に、2章では場所の多様性を、その経験のあり方に注目することで明らかにする。それをふまえ、3章ではサードプレイスという憩いの場をめぐる認識の変化について考察を行う。

I サードプレイスをどのように捉えるか

冒頭でも述べたように、本稿ではサードプレイスを、民俗学における場所をめぐる議論の文脈で論じていく。そこで本章では、民俗学における場所をめぐる先行研究を概観したうえで、日本におけるサードプレイス研究の状況を整理する。

民俗学における場所論は、これまで村落空間を対象に展開されることが多かった。例えば、市川秀之が村落における広場や会所をめぐる場所認識を[市川 2001]、八木康幸は葬式の際に使われる道や境の空間を通した場所認識を分析している[八木 1998]。他方で、都市空間についても、祭礼研究のなかに場所論的な関心が見いだせる。例えば、中野紀和は小倉祇園太鼓の分析を通じ、小倉の場所性を検討している[中野 2007]。また、怪異の研究において、内田忠賢は近世随筆の分析を通して、宮田登の境界論を批判しているが、これも場所認識への関心であったといえるだろう[内田 2011 (1990)]。

総じて、民俗学において、これらの主題は、市川による広場の分析などはあるものの、祭礼や怪異といった、非日常的な場所経験と結びつけられて論じられることが多かった。

次に、拙稿と重なる部分もあるため詳述は避けるが〔真保 2022b；真保 2025〕、サードプレイスの日本国内における研究動向を整理する¹⁾。冒頭でも触れたが、サードプレイスはアメリカの社会学者のオルデンバーグが提唱した概念であり、家（第一の場）でも職場（第二の場）でもない、第三の場とされる〔オルデンバーグ 2013〕。日本におけるサードプレイス研究はオルデンバーグの議論の邦訳が刊行された 2013 年以降、徐々に数を増している。

それらはいうまでもなく日本国内のサードプレイスのあり方を論じているわけだが、とりわけ、オルデンバーグが対象にしたアメリカ社会とは異なる日本のサードプレイスのかたちを、人の移動との関係に注意しつつ明らかにしたのがマイク・モラスキーである。モラスキーは、オルデンバーグがアメリカの車社会を前提に議論しており、サードプレイスは自宅の徒歩圏内に立地するとしているが、東京の場合は勤め人が電車で通勤することも多く、こうした交通背景を踏まえたうえでサードプレイスの枠組みを検討しなければならないが、これらはオルデンバーグの視野の外にあると批判している〔モラスキー 2014：29-30〕。冒頭でも述べたように、サードプレイスという場所経験は、それを経験する個人においても不変のものではなく、流動的であり、日常的な移動経路とその変化と関係している。モラスキーの議論は、サードプレイスそのものだけではなく、それをとりまく交通網といった移動の問題も含めて扱っており、重要な議論といえる。

このほか、小林重人と山田広明の議論のように、サードプレイスの類型化が試みられているのも、日本におけるサードプレイス研究の特徴といえよう。小林と山田は非常設型カフェの分析を通して、サードプレイスを、交流を主な目的とする交流型、人を気にせず個人的に訪れて居心地よく過ごすマイプレイス型に分類した〔小林・山田 2014〕。この枠組みを引き継ぐものとして、片岡亜紀子・石山恒貴は交流型を社交的な交流を目的とする社交交流型、社交以外の何らかの目的の対象である目的交流型に区分した〔片岡・石山

2017]。

なお、民俗学においては、日常的な生活空間における「場所」のあり方や、空間に対する居場所としての意味づけを分析した研究は蓄積が少ないといえる。ただし、一切存在しないわけではない。例えば、サードプレイス研究に近似する成果としては、島村恭則のモーニングの研究があげられる。島村は、モーニングに集う人びとが形成する場を、もう一つの公共圏であるとした〔島村 2020：180〕。サードプレイス研究と近い関心を持つものではあるが、島村のいう公共圏は会話が主題として置かれている。ただし、日本におけるサードプレイスは必ずしも社交の場ではなく、むしろ根底に「居心地のよさ」がある点は留意すべきであろう〔真保 2022b：110〕。

また、松村薫子は地域おこし研究の文脈から、広島県三次市にある古い酒蔵を再利用して拠点とした地域おこし団体「卑弥呼蔵」に着目し、活動参加者が活動を通じてその場所を「ホッとする、そして楽しい」「みんなでほっこりできる。いつのまにか、知らない人と話をしてしまう空間」だと感じていることを明らかにした〔松村 2016：87-88〕。

筆者もまた、生活者たちが駅前などの日常的な空間に対し、様々な意味づけを行っていることにこれまで関心をよせてきた〔真保 2022a〕。サードプレイスもまた、生活者たちが日々を過ごす空間のなかに「居心地のよい場所」を見出す、いわば場所経験の一つのあり方であり、民俗学が人びとの日常を捉えるうえで、有効な視点と考えられる。

ただし、日本におけるサードプレイス研究には、多数の問題点がある。1つ目は、調査方法である。近年では高谷邦彦による SNS における質的調査や〔高谷 2019〕、平野知見や柴田長生によるライフヒストリー研究との接続を試みる質的調査を行う研究もあるものの〔平野 2025；平野・柴田 2025〕、これまでの先行研究には量的調査によるものが数多くみられた。これはサードプレイス研究が社会学から出発した概念である他、小林と山田の議論などに代表されるように〔小林・山田 2014〕、社会福祉やまちづくりと関連づけられることも多く、空間の管理者側の視点から把握されてきたことにも起因するものと思われる。量的調査は情報の母数を集めやすく、傾向を推し量ること

は可能ではあっても、生活者がなぜそこをサードプレイスとするのか、あるいはなぜ利用しなくなったのかといった、サードプレイスの動態性に関わる諸問題には接近できない。そこで、本稿では民俗学がこれまで行ってきたような、質的調査の成果を踏まえて議論を行う。

2つ目に、上記ともやや重なるが、既存の研究では、空間の管理者の立場にたった議論が先行しているきらいがある。例えば、石山恒貴はサードプレイスの先行研究を整理し、類型を提示したうえで、「約90%の顧客が、ひとりで黙って過ごす場であるスターバックスは、典型的なマイプレイス型とみなすことができる」。さらに、「神楽坂の喫茶店を調査した研究では、カウンター席での常連の交流が観察されたが、これは伝統的サードプレイスとみなすことができ」る。そして、コワーキングスペースやコミュニティカフェは伝統的サードプレイスとテーマ型サードプレイスにあてはまるとしている [石山 2021: 9-10]。石山の議論では分析の視点が生活者ではなく、空間の側に設定されている。空間側からの視点では、サードプレイスに通うなかで移ろっていく場所経験やその変化には接近できない。サードプレイスとして経験されている場所は、果たしてその後もサードプレイスとして同質的なものとして経験され続けるのだろうか。そこが“サードプレイスではなくなる”ことは想定されないのだろうか。これまでのサードプレイス研究が生活者たちのサードプレイスをめぐる経験をアクチュアルな日常生活の問題として描ききっていたか、疑問に思えるのである。むしろ、このような場所経験の多様性・動態性が先行研究では見落とされてきたと言わざるをえない。筆者はサードプレイスを捉えていくうえで、人々の移動のあり様に注目する必要性を指摘したことがあるが、これも同様の問題意識による [真保 2025: 59]。

以上のような問題点をふまえ、本稿では関係論的場所論の視座をとりたい。この視座については、地理学者ドリーン・マッシーの議論が大いに参考になる。マッシーによれば、場所は関係性において節合された契機として想像できるという [マッシー2002: 41]。マッシーの場所理論は人文地理学者の熊谷圭知によって整理されている。熊谷によれば、「マッシーが提示するのは、場所のオルタナティブな解釈である。場所あるいはロカリティの固有性は、社

会関係や社会過程、経験と理解が、ある地点とともに現前して、相互作用し、紡ぎ合わされることによってつくられる」。そして、「マッシーは進歩的な場所観念として、次の4つを挙げる。第1に、場所は静態的なものではなく、プロセスである。第2に、場所は閉じた領域を持たない。第3に、場所は単一で固有のアイデンティティを持たない。第4に、これらは、場所の重要性や固有性を否定するものではない。グローバル化の中で、より大きなまたよりローカルな社会関係が混ざり合う焦点として、それぞれの場所は特有のものであり続けるのである」という〔熊谷 2013：8、下線部は筆者〕。

特に場所は関係論的に組み合わせられて作られていくものであり、場所は静態的ではなく、プロセスであるとしている点に着目したい。さらにいえば、場所経験は社会的移行や物理的移動を経ることにより変化をしていく。つまり、場所経験のかたちは人の移動のあり方に拘束されている。このことを考える際、社会学者ジョン・アーリのモビリティの議論は示唆に富む²⁾。アーリはモビリティーズ・パラダイムの要をなす特徴の一つとして、以下のように述べる。

「不動」の物質世界からなる相互に依存合った（引用者注：原文ママ）システムと、なかでもとくに動きのないプラットフォーム（送信機、道路、ガレージ、駅、アンテナ、空港、ドック）が移動の経験を構造化している。〔アーリ 2015：85〕

すなわち、人の移動もまた、システムとプラットフォームによって構造化されている。人文地理学者の森正人は「移動が場所を作り変える能動的なものだとすれば、それによってどのような場所感覚が作り出されているのかもまた、検討すべき課題となる」と指摘している〔森 2024：275〕。サードプレイスを生きられたものとして考えることは、生活者たちの様々な移動を考えることにもつながる。本稿では、以上をアウトラインとしつつ、場所経験のあり方を、移動の経験との関係を考慮しながら、実証的に考察していくことにする³⁾。

Ⅱ サードプレイスを過ごす

本章では、前章で示した問題意識をもとに行った調査の成果を示していく。これにより、一つの空間であっても人びとに多様に理解され、利用されていること、そして、様々な空間がサードプレイスとして認識されているありようを描く。先述のように、これまでのサードプレイス研究は場所経験の流動性や、日常的な移動とのかかわりにあまり注意を払ってこなかった。サードプレイスの経験の仕方は不変のものではない。それぞれのライフステージなどに合わせて経験が変容していくあり方を本章では描く。それに先立ち、ここでは調査方法を提示する。

本稿では筆者が行った対面でのインタビュー調査の成果に分析を加える。調査期間は2020年10月～2023年6月であり、話者は4名であった。なお、調査後、話者たちには適宜メールや電話といったツールを用い、事実確認を行った。調査期間は4年間と長期にわたるが、その間にコロナ禍による様々な生活変化があったこともデータの性格として考慮しておきたい。

ここでは一つの空間に限らず、銭湯、居酒屋、図書館など、様々な空間を横断的に提示する。これらの空間の歴史的背景を本来は記述すべきであり、資料操作として各種の問題点をはらむ可能性はあるが、一つの場が多様に経験されるのみならず、一人の生活者が、多様な場所を横断的に経験していることを明らかにするため、本稿ではこのような形をとった。

以下、特定の空間ではなく個々の生活者への視点から、人びとがどのような空間をサードプレイスとして経験しているかを、話者から聞き取ったデータにより明らかにする。まずは、事例1をみてみよう。

【事例1】 話者a (1948年生、神奈川県川崎市麻生区在住、2022年10月～2023年6月聞き取り)

かつて東急大井町線中延駅近辺で勤務をしていた。自宅は小田急線の新百合ヶ丘駅近辺にあるため、東急大井町線に乗り、溝の口駅でJR南

武線に乗り換えていた。その際に、溝の口にある西口商店街の店などで「会社の帰りに1杯」飲むことを習慣にしていた。しかし、定年退職後、別の職についてからは通勤ルートが変わり、南武線沿線である武蔵新城駅近辺に勤めている。そのため、溝の口で乗り換えをせず、通過するだけになり、降りる必要がないので、溝の口の居酒屋で飲むことはなくなった。現在は、JR南武線の武蔵新城駅近辺で勤務をしているため、数ヶ月に1回程度武蔵新城駅前の居酒屋で飲む程度になった。

話者 a は、通勤ルートの変更という日常的な移動経路の変更に伴い、憩いの場として利用していた居酒屋に行かなくなった。通勤ルートの変更に伴うサードプレイスの変化は次の話者 b の事例にもうかがえる。拙稿でも示したことがあるが〔真保 2025：50-51、58〕、本稿でも検討すべき事例であるため、再掲したい。

【事例 2】話者 b（1972 年生、神奈川県川崎市川崎区在住 2020 年 10 月、2023 年 6 月聞き取り）

銭湯に通い始めて 20 年以上になる。以前は銭湯の近辺で勤務し、居住していたため、毎日のように通っていたが、現在は銭湯からは離れた南武線沿線に勤務し、川崎駅近辺に居住している。自宅には内風呂があるが、話者 b によれば、内風呂と銭湯は全くの別物である。理由としては、銭湯は大型の浴槽で思いっきり足を伸ばすことができ、リラックスできるためである。

話者 b にとって、銭湯は息抜きができる場所である。そして、毎日銭湯に通っていたころは知り合いや友人ができたが、最近は通うペースが週 2~3 回になり、そのように頻度が減ってからは、友人はできていない。

銭湯は、現在の通勤経路から外れていることから、疲れてしまい、通う頻度は年に 1~2 回ほどとなっている。しかし、銭湯が好きであるため、現在でも通っているようである。時間がないときは通勤経路の途中

にある鹿島田にある銭湯を、時間的余裕がある際は川崎駅から徒歩 25 分ほどの銭湯に行く。

前述の事例 1 でも示したように、通勤ルートの変化は新たなサードプレイスを生む。時間的余裕の有無によって、通勤ルートのなかで途中下車するか、あるいは自宅の最寄り駅から少し離れたところを選ぶかが変わるようである。そして、サードプレイスへの愛着の要因の一つに、他者との交流があることを示すのが、次の話者 b の語りである。話者 b は 25 年ほど前に別の銭湯（現在は廃業）にも通っていたが、そこでは常連客同士の交流があったことにより、その銭湯が好きになり、10 年以上も通っていたという。

現在と違い、人との距離がグッと近い時代でしたので、(中略)片目を失った元プロボクサー、アル中の夫婦、銭湯が好きなイギリス人の大学教授、変わり者のヨガインストラクター、偏屈な中華料理人、今で言うニューハーフの日本舞踊の先生など自分の住んでいる世界とは異なる個性豊かな人々との交流が当時の私にとって、とても刺激的であり、20 代の私の悩みなどもよく聞いてもらっていました。

異質な人びととの交流の刺激が銭湯を訪れる理由であったと語る。話者 b においては、他者との交流が銭湯という場所の魅力になっていたが、このような他者との接触は、次で示す喫茶店について語る話者 c の事例のように、必ずしも望ましい形で現れるとは限らない。

【事例 3】 話者 c (1965 年生、神奈川県高津区在住、2023 年 6 月聞き取り)

話者 c は仕事場がある溝の口から JR 南武線で 1 駅の武蔵新城駅を最寄り駅としており、数年ほど前から月に 2 回ほど、仕事終わりに駅前にあるチェーン営業の喫茶店で休憩してから帰ることとしている。仕事終わりに一息つける喫茶店で、通勤経路上にあるため利用しやすく気に入っている店ではあるものの、以下で示すような経験をした。

ある日、ソフトクリームを食べていたところ、一人席で女性が電話をしていた。その様子は話者cによれば「大きな声でさ、ナントカ団子！とか大きな声で、ナントカ団子が美味しい！」と非常に大声であったようであり、あまりにも大きな声であったため、「隣の二人連れのおじさんがさ、おばさんが取りに行ってる間に苦々しい顔してて」と、周囲の利用者も迷惑を感じるほどであった。話者c自身も注意をしようと考えたという。そして、「あのおばさんがもし常連だったら絶対嫌だ」と思い、その店から足が遠のいてしまった。

事例3からは、話者cの望む喫茶店での過ごし方に反する他の利用者への批判的なまなざしが読み取れる。喫茶店は銭湯と同様に不特定多数が利用する空間であるため、利用者間の規範意識の衝突が発生することがある。それによって、話者cはサードプレイスとして利用していたこの喫茶店に行きたくなくなってしまった。

店内において大声で電話をかけるという、ありふれた出来事であっても、場所への嫌悪につながり、サードプレイスはその価値を失ってしまうことにもなる。ある空間がサードプレイスであることの根底には居心地の良さがあるためであり、様々な出来事によってその価値が変動する可能性を備えているのである。そのことを次の事例4で確認し、考察に移りたい。

【事例4】 話者d（1943年生、東京都府中市在住 2021年11月～2023年6月聞き取り）

居酒屋に15年ほど通っていた。利用客同士の仲が良い店であり、野球やマラソン、芋煮をする。現在でも野球チームは続いており、1ヶ月に1回ほど集まる。居酒屋へは定年退職後に時間が出来るようになったため、通うようになったが、店主の奥さんが亡くなったため、閉店になった。その後オーナーが前の店の店主の息子らに交代した店では、オーナーと馬が合わず、行かなくなってしまった。

昔は京王本線の府中駅前にあった飲み屋街が、借地のため再開発で無

くなり、行きつけの店もなくなってしまった。行きつけは1軒しか残っていない。

話者dは府中市西府在住であり、生活圏としては、府中などより谷保のほうに行く。谷保のほうに向かうと信号機がなく行きやすいからである。また、西府文化センターには図書館があり、よく利用する。これはあと何年生きるかわからず、身辺整理として図書の整理を行ったためである。また、よくスーパーで酒を買って、公園で弁当とともに飲む。

事例4からは、一人の生活者であっても、様々な空間を移動し、その中で多様にサードプレイスを見出し、経験していることがわかる。図書館を利用するようになった要因として身辺整理があげられているが、これはライフステージの移行に伴い新たなサードプレイスを見出していったと理解することができる。

さて、本章ではサードプレイスを、主に人の側に注目して描いてきた。ある一人の人間であっても、日々の移動の中で様々な空間をサードプレイスとしていることが示し得たであろう。また、サードプレイスの経験が変化していくあり方もうかがえた。いずれも、きわめて自明でありふれた空間との関わり合いかたであったといえるが、そのようなところにこそ、先行研究が描くことのなかった、生活者たちによって生きられる空間としてのサードプレイスが立ち現れてくるのである。

Ⅲ 動き続ける日常の中で見えてくるもの

これらのサードプレイスは、生活者たちによってそれぞれ自由に選択されているといえるのだろうか。人びとは一見自由に移動し、思い思いの場所を選択しているようにみえても、なんらかの要素に拘束されている可能性がある。それは、あえてサードプレイスを提供しようとするような事業者の思惑のことではない。サードプレイスは何によってサードプレイスとなり、何によってサードプレイスではなくなってしまうかについて、本章では、

ここまでの事例を踏まえ、改めてサードプレイスの動態性について考察を加えていきたい。

まず検討してみたいのは「移動」である。移動と場所認識は密接に関わり、移動は時に場所認識を変化させる力を持っている。例えば、話者bの事例2を参照されたい。話者bの場合、かつては東京都大田区に勤務・居住していたことから、銭湯に通う頻度が高かった。しかし、勤務地が変わってしまったことから、以前利用していた銭湯に通う頻度が下がり、現在の居住地に近い銭湯に通うようになった。居心地の良さによって銭湯がサードプレイスであることは変わらないといえるが、勤務地・居住地の変化がそれまでのサードプレイスを放棄し、新たなサードプレイスを見出すことに繋がっていると考えられる。通勤ルートの変更という移動の問題がサードプレイスのあり方を変えているわけである。

事例1もこれを大きく裏付けるものとなっている。話者aの場合、通勤ルートの乗り換え駅となっていた溝の口駅近辺の居酒屋をサードプレイスとしていた。しかし、通勤ルートの変更により武蔵溝ノ口駅で降りる必要がなくなったため、溝の口にあった居酒屋はサードプレイスではあり得なくなった。また、現在は職場からの最寄り駅である武蔵新城駅近辺にサードプレイスをもっている。鉄道という、私達が日々利用する移動手段がサードプレイスという場所認識に影響を及ぼしているといえるが、特に、その選択は、居心地そのものではないファクターに規定されているともいえるだろう⁴⁾。

このような鉄道網の拘束性とサードプレイスについて考察するうえで、社会学者の南後由和の述べる「ひとり空間」の議論は示唆に富むものである。ひとり空間とは「何らかの仕切りによって、「ひとり」である状態が確保された空間」[南後 2018:30]であり、生活者たちによる牛丼屋や半個室型ラーメン店、カプセルホテルにおける一人での過ごし方を検討している。南後はこのひとり空間と鉄道網の関係について、以下のように述べる。

日本の都市部（郊外も一部含む）は、鉄道会社によって駅のみならず、沿線の住宅地や商業施設の開発がなされてきた歴史をもち、人びとの駅

に対する帰属意識が強い。(中略) そのため、日本の都市部では、自宅と学校・職場の結節点にある駅周辺に、消費生活の圏域が広がっており、さまざまな飲食店が集積することになっている。(中略) このように、日本の都市に「ひとり空間」が集積している理由には、日本における空間をめぐる境界意識や規範に加え、鉄道に強く依存した都市構造および交通体系がある。[南後 2018 : 164-165]

また、本稿冒頭で示したアーリの議論も南後の議論と軌を一にするものである。アーリは次のようにも述べる。

(前略) 鉄道システムは根本的な変革を引き起こし、時間、空間、日常生活の輪郭を秩序化し直してきた。鉄道によって、人間の生活が機械に依存し、機械と密に組み合わさっていく長い時間が始まった。[アーリ 2015 : 140]

人間の生活にとって鉄道といった機械の存在が不可欠になるという上記の点は、先に筆者が述べた鉄道網の拘束性と響き合うものであり、アーリの「蒸気機関によって、人間の生活が不可逆的に機械とつながり、依存するようになってゆく長いプロセスが始まった」という指摘と重なり合う [アーリ 2015 : 141]。サードプレイスは、生活者自身が自由に選んでいるというよりも、日々の移動経路の中で選びとっている (あるいは選びとらされている) ものである⁵⁾。つまり、サードプレイスは一部企業が自称するような、提供する (押し付ける) ものではないし、生活者たちが力強く創造していくようなものとも言い切ることはできない。諸空間の規格や、空間同士の経路に依存しつつ、見出されていくものといえる。

なお、移動するのは当然、話者だけではない。空間を共有する他者もまた移動している。そして、人の移動によって空間そのものが変容していくことも想定できよう。次に生活者を取り巻く環境の変化と、それに関わる他者の移動に目を向け、考察を行いたい。まず、サードプレイスを変容させる要因

は移動だけではない。予期せぬ事態の発生によって、環境が変化し、その場所の価値が変わってしまうこともある。事例4で示した居酒屋は、もともと客同士の交流が盛んであった様子が、マラソンや芋煮会の開催といった記憶を通して語られる。しかし、店の事情により閉店となり、居抜き物件として新しく居酒屋が経営されることとなる。話者dは新しい店にも行って見たものの、経営者と馬が合わず、通わなくなってしまった。物理的には同じ空間であっても、人間関係の変化によってサードプレイスを失ったと捉えることができる。先述の話者bの場合、話者自身の日々の移動のあり方が変化するのに伴ってサードプレイスが失われていたのに対し、話者dの場合は空間の質的変容がきっかけとなっているのは対照的である。

このような空間の変容は居酒屋だけに訪れるものではない。駅前再開発もまた、駅周辺の空間を大きく変化させるものである。話者dは事例4のなかで、府中駅前の再開発で区画整理が行われたことにより、行きつけの居酒屋が無くなってしまったことを語る。再開発とは行政などが何らかの目的をもって、その空間を整備する、つまり方向づけて意味づけるものであり、いわば、上からの場所化と呼べる。このような上からの場所化とは対照的なものに、ヴァナキュラーな場所化があるといえよう。サードプレイスのような実践がまさにそれに該当するが、公園で酒を飲み、憩う、という語りは、いずれもそのような行為に当てはまる。

そして、他者の移動もサードプレイスでの経験を変容させることとなる。事例3を考えてみよう。チェーン展開する喫茶店のような空間をサードプレイスとした場合、多くの人々と空間を共有することとなる。喫茶店の立地が駅前になれば、利用者自体の流動性が高くなることも考えられる。話者c自身も仕事帰りに少し立ち寄って休憩してから帰ることを目的に訪れていることから、店内の流動性を高める利用者の一人といえよう。多くの人が利用し、流動性が高い空間にもなれば、そこは異質な他者が数多く集うこととなる。だからこそ、自らの規範意識からは外れたものが同席することもあり、そうした存在によって、話者cの喫茶店通いは終わりを迎えることとなった。このような話者cをとりまく状況を的確に表したのが、以下の森の指摘である。

(前略) たとえどれほど社会が流動化し、多様化しようと、人びとや事物は、現実であれ仮想であれ、特定の地点で交差する。それが場所を構成する。誰と誰、何と何、誰と何が、出会うかによって、その場所が持つ意味は異なる。新しい人がそこにやってくれば、場所の解釈も異なる。場所感覚が緊張関係に陥ることもある。その出会いの形式が変われば、場所も変わる。このように、場所は終わることなく作られ続けている、そして何かに成り続けている過程^{プロセス}なのだ。[森 2024 : 207-208]

人がどれだけ大事にしている場所があっても、その場所は不変のものではありえない。サードプレイスは所与のものとして存在するのではなく、人と人、人と場所、それぞれが結びつきあうなかで生成されていく。畢竟、サードプレイスとは関係性のなかで組み合わせさっては変わっていく場所経験への名付けであって、恒常的に強固にあるというよりは、泡沫的存在といえる。

本章では、移動の経路の問題およびサードプレイスが鉄道網などの交通インフラだけでなく、人やライフコースといった諸要素の関係性によって経験のされ方が変容していくことを明らかにした。

通勤ルートが変われば、生活者たちが利用する施設類も変わる。他の利用者が気に入らなければその場所には行かなくなる。これはごく当たり前のことではあるが、同時に自明化されていて不可視化されている、問われることがなかった人びとの日々の営みであろう。日常学としての民俗学にとって、このような自明化されているような生活者の日常こそが問われるべき問題と考える。本稿では、サードプレイスという概念を用いることにより、生活者の「憩いの場」が関係性の中でいかに変化していくのかを明らかにできたいえよう。

むすびに

本稿での議論を整理しておきたい。本稿では、民俗学における場所論への関心のもと、サードプレイスに目を向け、生きられる空間としてとらえたい

えて、分析を行った。第1章では議論の前提として民俗学における場所論、サードプレイス研究を整理したうえで、既存のサードプレイス研究では場所の動的な側面が等閑視されていることを明らかにした。第2章では、生活者たちのサードプレイスがいかに変容をしたかについて事例を提示した。これにより、ライフステージに合わせて、サードプレイスを多様に利用し、時には変容させていくあり方がうかがえた。第3章では、サードプレイスと移動の関係性について考察を試みた。総じて、就労状況といった社会的状態の変化によってサードプレイスという場所経験が変容する。また、通勤経路といった日々の移動経路の変化によって新たに形成されることもあるし、予期せぬ他者の移動によって終わりを迎えることにもなる。

第1章でも確認した通り、これまでのサードプレイス研究は量的研究が盛んであり、質的研究は蓄積が多くなかった。本稿で示した質的調査による事例からはサードプレイスの動態性、生きられているあり方がうかがえる。サードプレイスとは、生活者たちの日常生活における場所認識の問題でもある。就労状況といった社会的状態が変化すれば憩いの場の感じ方は変化する。あるいは移動経路が変われば行きつけの憩いの場が変化する。これらは「当たり前」のことではあるが、民俗学がこれまで研究を積み重ねてきた、生活者たちの日常の一コマである。

ところで、本稿では社会的移動に伴う場所経験の変化、通勤経路といった物理的移動の変化に伴う場所経験の変化といった移動の問題を考察した。民俗学における日常における移動の研究について、塚原伸治は松田陸彦のいう「移動の日常性」[松田 2014]をひきつつ、「移動の日常性」をふまえたものに民俗学が変わりつつあることを指摘している [塚原 2022: 23]。今後は、移動の日常性について、さらなる考察を深めていかねばならない。

注

- 1) 紙幅の都合、および拙稿 [真保 2022b] との重複を避けるため、オルデンバーグの述べたサードプレイスの整理については、拙稿を参照のこと [真保 2022b: 101]。また、諸外国でのサードプレイス研究は平野によってまとめられているため参照されたい [平野 2025]。

- 2) 近年の民俗学における移動をふまえた議論の整理については塚原の議論を参照のこと [塚原 2022]。
- 3) ここで述べた点をふまえ、本稿ではサードプレイスの性格として、①本人にとっては気楽に参加できる場、②会話をしたり、黙っていたり、行動の自由が許される場、③空間内において、その場の外における肩書などがなくなる（あるいは薄れる）場、④気楽に過ごせる場であることの4点を想定している [真保 2022b : 108]。
- 4) 本稿では主に鉄道網を中心に発達した首都圏でのサードプレイスの事例を扱った。車社会を中心とした地域であっても、運転手は居酒屋を利用することができないなど、移動手段による拘束性が発揮される可能性が想定される。
- 5) 鉄道の話からは逸れることとなるが、移動とサードプレイスの問題を考えるうえで、2章の話者dの事例も、移動の拘束性をさらに裏付けるものである。話者dは、府中市の西府に住んでいるが、府中よりも、谷保に出るほうが楽だと述べる。理由として、信号機がなく歩きやすいことがあげられたが、つまり、自動車やそれを統制する信号機という移動のシステムによって、憩いの場を求めるあり方が拘束されている。

参考文献

アーリ、ジョン

2015『モビリティーズー移動の社会学ー』（吉原直樹・伊藤嘉高訳）作品社

石山恒貴

2021「サードプレイス概念の拡張の検討ーサービス供給主体としてのサードプレイスの可能性と課題による検討」『日本労働研究雑誌』63（7）

市川秀之

2001『広場と村落空間の民俗学』岩田書院

内田忠賢

2011（1990）「江戸人の不思議の場所ーその人文主義地理学的考察ー」『都市民俗基本論文集2 都市と都市化』岩田書院

オルデンバーグ、レイ

2013『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』（忠平美幸訳）みすず書房

片岡亜紀子・石山恒貴

2017「地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果」『地域イノベーション』9

熊谷圭知

2013「場所論再考ー他者化を越えた地誌のための覚書ー」『お茶の水地理』52

小林重人・山田広明

- 2014 「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究—石川県能美市の非常設型「ひよっこカフェ」を事例として」『地域活性研究』5
- 島村恭則
- 2020 『民俗学を生きる—ヴァナキュラー研究への道—』（関西学院大学社会学部研究叢書 第10編）晃洋書房
- 真保元
- 2022a 「駅前広場の民俗学・試論—「迷惑」という感情と場所を視座に—」『現在学研究』9
- 真保元
- 2022b 「民俗学におけるサードプレイス論の可能性」『常民文化』45
- 真保元
- 2025 「現代における銭湯の利用への一考察—サードプレイスを視座に—」『常民文化』48
- 高谷邦彦
- 2019 「サード・プレイスとしての Twitter—子育て主婦ユーザの場合—」『名古屋短期大学研究紀要』57
- 塚原伸治
- 2022 「発展的解消後の「社会」領域」『日本民俗学』312
- 中野紀和
- 2007 『小倉祇園太鼓の都市人類学—記憶・場所・身体—』古今書院
- 南後由和
- 2018 『ひとり空間の都市論』筑摩書房
- 平野知見
- 2025 「サードプレイスに尽力する人たちのライフストーリー研究 1—サードプレイスの構築過程に着目して—」『京都文教大学地域協働研究教育センター 地域協働研究ジャーナル』4
- 平野知見・柴田長生
- 2025 「サードプレイスに尽力する人たちのライフストーリー研究 2—支援者たちの「人生遍歴」を読み解く—」『京都文教大学こども教育学部研究紀要』5
- マッシー、ドリーン
- 2002 「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」（訳：加藤政洋）『思想』922
- 松田睦彦
- 2014 「移動の日常性へのまなざし「動」的人間観の獲得をめざして」門田岳久・室井康成（編）『〈人〉に向き合う民俗学 [叢書〈知〉の森10]』森話社
- 松村薫子
- 2016 「人の心を豊かにする地域おこし—広島県三次市「卑弥呼蔵」の活動事例から—」『現代民俗学研究』8

モラスキー、マイク

2014 『日本の居酒屋文化 赤提灯の魅力を探る』 光文社新書

森正人

2024 『誰が場所をつくるのか—ポストヒューマニズム的試論』 新曜社

八木康幸

1998 『民俗村落の空間構造』 岩田書院